

# ドキュメンタリードラマ表現の萌芽を探る ——NHK ラジオ草創期「ラヂオ風景」を中心に

杉田 このみ

## はじめに

2025年に日本でのラジオ<sup>1</sup>放送開始100周年となる。また長引くコロナ禍で、若い世代の間でもラジオに注目が集まっている。いま改めてラジオの役割や魅力について草創期から振り返り、未来に生かしていく機運がより一層高まっている。

前稿<sup>2</sup>では、ラジオ草創期の1930年（昭和5年）放送されたラジオドラマ『クラッシン号、イタリア号を救う』<sup>3</sup>（以下、『ク号』）と築地小劇場<sup>4</sup>に着目し、ドキュメンタリードラマ概念の萌芽について検討した。『ク号』放送当時は、20シーンに及ぶカットバックで世界中を繋ぎ、ラジオの聴覚的な特性を生かしたことが高く評価されていたが、1968年に「ドキュメンタリードラマ

---

<sup>1</sup> ラジオ放送草創期は「ラヂオ」と表記されていた。本稿では、一般的な意味では「ラジオ」、当時に合わせるときは「ラヂオ」と表記する。また以下、引用は内容を変更しない程度に、適宜現代表記とする。

<sup>2</sup> 「ラヂオドラマ『クラッシン号、イタリア号を救う』（1930年放送）にドキュメンタリードラマ概念の萌芽を探る」（『専修大学人文科学研究所月報』第319号、2022年10月号、pp. 31-49）。

<sup>3</sup> 台本に書かれている題名は『クラツシン號イタリア號を救ふ（ノビレ少將遭難記）』。1930年11月10日放送。午後8時45分～午後9時40分。原作者：フリードリッヒ・ヴォルフ 武田忠哉 翻訳、青山杉作放送指揮。1928年に実際に起きた遭難事故をもとにしている。

<sup>4</sup> 1924年（大正13年）、小山内薫は、土方与志（1898-1959）らと築地小劇場を旗揚げする。これは小山内らの劇団名であり、日本初の常設劇場の名前でもある。

のはじまり」と言及された<sup>5</sup> ことにより、以後、ドキュメンタリードラマの先駆作に位置付けられている。1960年代までにすでに「ドキュメンタリードラマ」の概念は作り上げられており、番組名に付記されていたり、番組説明で明記されたりするようになっていく。1960年代当時、「ドキュメンタリードラマ」とは、次の5つのいくつかを満たしている番組として扱われていた。

- (1) 実際にあった出来事
- (2) 現地録音（あるいは当事者の出演）
- (3) 再現
- (4) 物語として演出されている
- (5) 報道性、社会性が強い

これに加えて『ク号』の特徴は、新たなメディアとして登場した「ラジオならではの表現」として聴覚的な特性と放送の同時性を生かした点である。聴取者に「これは、今まさに本当に無線でやりとりされている」と錯覚するようなリアリティが醸成されている。しかし外国の戯曲が日本語に翻訳されたことで、そのリアリティが損なわれてしまった。また「ドキュメンタリードラマのはじまり」と評されていても、この『ク号』を直接的に継承し発展させたドキュメンタリードラマは確認できない。さらに、もともとヴォルフの戯曲自体が、ドキュメンタリードラマの要素を多く有していることから、日本独自ののはじまりとは言えない。

ここで、ラジオドラマというジャンルを離れ、ラジオの新たなメディアの特性を生かした草創期の番組として、「ラヂオ風景」を取り上げたい。「ラヂオ風景」はラジオ放送開始当時の黎明期の番組であり、その先駆的な取り組みは注目に値する。当初は擬音を駆使し、街の情景を描写する試みが中心であったが、のちに、お花見や花火大会など現場からの中継音を取り入れて、会話劇を展開させる内容も現れるようになる。

本稿では、ラジオ草創期の聴覚的特性と放送の同時性を生かした観点から「ラヂオ風景」に着目し、当時の書籍や、新聞記事からその先駆的試みにつ

---

<sup>5</sup> 日本放送協会編『放送夜話—座談会による放送史』日本放送出版協会、1968年、p. 91。

いて検討する。

## 1. 「ラヂオ風景」とは 音のリアリティの追求

NHK<sup>6</sup> は、ラジオ放送事業を「純然たる公益事業」<sup>7</sup> とし、国民の生活文化に資するものとして、次の3つの種目で放送プログラムを構成した<sup>8</sup>。

- (1) 報道放送
- (2) 教養放送
- (3) 慰安放送

この(3)「慰安放送」のプログラムとして「ラヂオ劇」「落語」「浪花節」「和楽」などを放送していた。これらは聴取者嗜好調査でも高い人気があり、ラジオ加入者の増加を牽引するものだった。当初は、舞台演劇などが、そのままラジオ劇として放送されていたが、「ラジオならではの面白さ」が追求されるようになった。小山内薫が翻訳、演出したラジオドラマ『炭坑の中』(1925年8月13日放送)は、その代表的な番組となった。

音だけで表現するラジオドラマでは、効果音が重要な要素とされ、さまざまな試行錯誤がなされた。当初は実物を使って効果音を出していた。たとえば、ラジオドラマ『暮れがた』(1925年8月30日放送)では、浅草の青年団と子供たち100人にスタジオに来てもらい、実際に神輿を担いでもらい背景音とした。さらに推理ラジオドラマ『科学戦』(1926年3月10日放送)では、ダイナマイトを仕掛け実際に生放送中に爆発させたが、音が大きすぎて、小さい音にしか聞こえなかった。このように実物を用意して音を出すこともあれば、それがマイクを通すとうまくいかないこともあった。また、実物をスタジオに持って来られない時や、実物を使っても「本物らしく聞こえない」時は、擬音を用いた。擬音は、歌舞伎の世界でも古くから使われていたが、

---

<sup>6</sup> 正確には東京放送局(JOAK)であるが、本稿では「NHK」と統一する。

<sup>7</sup> 日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和6年』1931年、p. 133。

<sup>8</sup> 日本放送協会編『日本放送協会史』日本放送協会、1939年、p. 187。



図1 「波ざる」『ラヂオ演劇』より (p. 42)

太鼓を小刻みに叩くのを風の音とするなど、象徴的な音だった。明治時代に新派の演劇の世界で「写実音」が追求されるようになり、ラジオ初期にはそれが用いられた。俗に「波ざる」(図1)と呼ばれる小豆が入った行李を左右に振って波の音とする方法は、その一つである。

小山内は、ラジオドラマの効果音について次のように述べている。

火を燃やして、その音が出ればこれでいい訳だが、マイクロホンを通しては実際と違う場合があるのだから、成るべくはそう大掛かりでなしに工夫したい。

(略)

より簡単な装置で、それと同じような擬音が出せたら申し分ないし出来る限り簡便な方法で出来るだけ実際に近い音響を出すように工夫することは是非必要である。<sup>9</sup>

<sup>9</sup> 小山内薫「ラヂオ・ドラマに於ける台詞」『無線と実験』第5巻5号、1926年、p. 557。

このような「本物らしさ」「音のリアリティ」を研究開発によって追求された擬音と、ラジオの聴覚的特性と放送の同時性を生かした番組であることが「ラヂオ風景」の特色である。『ラヂオ年鑑 昭和6年』では、「ラヂオ風景」とは「ラヂオドラマの進歩向上にともないラヂオドラマの形式と内容を変化させることによって、平易に、興味を多く、その上有益な何者かを加へる趣向を盛ったもので、所謂趣味と実益とを兼ね備えたものである」(p.286)と説明されている。

佐々は、1925年(大正14年)7月20日放送「東京景物詩『夏の夜』」をその先駆的作品と指摘する<sup>10</sup>。『夏の夜』は東京の夏の夜の風景を擬音と対話で描写した番組である。放送当日の『朝日新聞』<sup>11</sup>によると、東京の雑踏の音—豆腐売りや金魚売りの声、縁日の音から自動車や電車の音と変わって、「J-O-A-K、こちらは東京放送局であります、これからハーモニカのソロを放送します」「そらラヂオだ」「面白いな」というやり取りが放送されている。ラジオ放送の中で放送が始まるというメタ的な構成になっている。それから川を渡る屋形船の動きに合わせ、佃囃子の音、吉原茶屋の賑わい、犬の遠吠えなどが聞こえる。深夜の拍子木を打つ音が聞こえた後、暁を告げる鐘の音がして「J-O-A-K……」と締めくくっている。

その後も「景物詩」として、都会の情景を擬音や会話で描く番組が不定期に放送された。この『夏の夜』放送前日には、ラジオ劇『大尉の娘』が放送され、約1ヶ月後にラジオドラマ『炭坑の中』が放送されたことを鑑みると、ラジオドラマの制作と合わせて方法論が模索された背景が窺える。

1928年(昭和3年)7月31日に初めて「ラヂオ風景」と冠がついた「ラヂオ風景『隅田川十二景』」が放送される。隅田川の名所12ヶ所を、それに纏わる和楽、洋楽、和歌、端唄などの演芸を取り入れて川の流れの擬音と共に巡っていく趣向である。次のように、和歌や洋楽、映画などさまざまなジャンルを取り入れてモンタージュ的に表現した内容であった。台本の一部を佐々より引用する。

<sup>10</sup> 佐々健治『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』同文館、1934年、p.247。

<sup>11</sup> 「ラヂオの中でラヂオ」『朝日新聞』1925年7月20日付朝刊、p.7。

### 第一景 鐘ヶ淵

先ず芝居の鳴り物、杵の頭で始まる。しばらく常磐津「双面月姿絵」、これが消えると「隅田川行進曲」という壮快な洋楽。それが消えると、水の音、艀の音。

### 第二景 三園堤

落語「野晒」で始まる。それから艀の音、水の音などする。次は清元「道行浮城鷗」（お染）の一節

（略）

お染、うすくなり、三味線にからんで、水の音が爽やかに聞こえてくる。清元がやみ、本釣りの音がボンと聞こえてくる。お次は約十分、「隅田川花御所染」という本読みあり

（略）

### 第六景 宮戸川

「三社祭」のにぎやかな囃子がしばらく、水の音、艀の音。

（略）

### 第九景 柳橋

柳にちなんだ長唄「岸の柳」、約十分。

（略）

### 第十二景 永代橋

終幕は永代橋。水の音がしきりに聞こえる。祭礼囃子がにぎやかに入り、洋楽の「隅田川行進曲」、これに続く映画物語「名月八幡祭」が鳴物入りで大詰めをつくる。（佐々健治『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』pp.251-54）

このように、ある街の情景を擬音で描きながら、和楽や浪曲など他の演芸を取り入れ一つの番組の中に融合していく手法が「ラヂオ風景」の特徴の一つとなっている。特権階級の娯楽が、短い時間にまとめられ、音だけで分かりやすく楽しむことができる「ラジオならではの」番組といえる。

佐々はこの『隅田川十二景』を、「はじめてラヂオ風景の外形が整ったもの故、これはラヂオ藝術史上、深く記念さるべき作品」（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』p.254）と高く評価している。

ドキュメンタリードラマ表現の萌芽を探る——NHK ラジオ草創期「ラヂオ風景」を中心に

また、「景物詩」とその後の「ラヂオ風景」では、人気の漫画家、池部鈞（1886-1969）<sup>12</sup> や岡本一平<sup>13</sup>（1886-1948）、水島爾保布<sup>14</sup>（1884-1958）らを脚本と演出に起用した。ラジオドラマでは劇作家が中心となっていたが、漫画的描写を取り入れ、新機軸を生み出そうと試みている。池部が作・放送指揮した「記念放送景物詩『夏の一』」（1927年7月13日）では、朝から夜までの郊外のまちの暮らしを描写している。

（イ）郊外の朝

近所のはたきバタバタという音で明ける。時計の音がチンチン、牛乳屋の威勢のいい音、一家揃って朝飯だ。

（略）

（ハ）下町の宵

時々アズキアイスを注文する声、さては浪花節の流しが入ってくる。

（略）

（ニ）山の手の夜

自動車の音が聞こえてくる。秋ももう近い。蟲の音がかまびすしい。（略）ベートーベンの「月光曲」、秋近い山の手の夜は、蟲の音と共に益々更けていく（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』pp.249-50）

都会の情景描写が中心であり、ラジオドラマのような劇的な葛藤や主題はない。当時娯楽番組として人気だった浪花節や端唄を取り入れ、気軽に楽しめる番組づくりをしている。佐々は「安易な、朗らかな、気分を求めているのが、この風景詩の特徴」（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』p.250）と述べている。

---

<sup>12</sup> いけべ・ひとし。東京出身の風刺漫画家。

<sup>13</sup> 漫画家、文筆家。芸術家の岡本太郎（1911-1996）の父。

<sup>14</sup> みずしま・におう。日本画家、小説家、漫画家。

## 2. 「ラジオ風景」にドキュメンタリードラマ的手法の萌芽を探る

### 2.1. ラジオ放送の聴覚的特性と同時性を生かした番組づくり

「ラジオ風景」では、ラジオの聴覚的特性と放送の同時性を生かすことにより、リアリティを醸成する狙いが探求された。1929年（昭和4年）8月24日放送「ラジオ風景『水の上の物語』」（池部鈞 作・放送指揮）（図2）<sup>15</sup>では、隅田川上流の水より中継され、川岸にマイクを据えて船によって移動しつつ放送された（『ラジオ年鑑 昭和6年』 p.218）。夏の暑さを実際の川の水音によって和らげる効果を狙った試みである。



図2 中継の様子。画面中央にマイクがある（『ラジオ年鑑昭和6年』 p.220）より

また、1932年（昭和7年）7月23日放送「ラジオ風景『花火と水と』」は、両国の川開き当日に実況中継を取り入れていろいろな演芸を取り入れて放送

<sup>15</sup> 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和6年』1931年、誠文堂、p.220。「国会図書館デジタルコレクション」（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1907532/1/130>）2023年1月31日取得。



した。当日の『朝日新聞』<sup>16</sup>には「雨天の場合は順延」との記事が掲載された。慰安放送の中でも、季節の行事を取り上げることで、放送の同時性を強く意識している。

さらに、「ラヂオ風景」は、国家的記念行事も番組に導入している。たとえば、1930年（昭和5年）3月24日から26日に関東大震災からの復興を記念する国家行事、「帝都復興祭」<sup>17</sup>が開催された。昭和天皇が、復興事業で作られた道路や施設を巡幸するもので、その記念行列、花電車（図3）<sup>18</sup>の運行など、国民総出で大いに賑わった様子を伝えている（図4）<sup>19</sup>。



図3 絵葉書「奉迎の市民と花電車の行列 帝都復興祭記念 市内の光景」

<sup>16</sup> 「今夜雨天ならラヂオ風景は順延」『朝日新聞』1932年7月23日付朝刊、p. 5。

<sup>17</sup> 1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災からの復興を記念して開催された。3月24日に昭和天皇が各地を巡幸し、26日に記念式典が開催された。東京市役所編『帝都復興祭志』1932年、東京市役所。

<sup>18</sup> 「東京都立図書館 TOKYO アーカイブ」より。

(<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=0000000007-00002986>)

<sup>19</sup> 「東京都立図書館 TOKYO アーカイブ」より。

(<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=0000000007-00002986>)



図4 絵葉書「宮城前通御の鹵簿と市民の雑踏 帝都復興祭記念 市内の光景」

「ラヂオ風景『帝都復興』」（水島爾保布 作・放送指揮）は、26日の帝都復興祭式典と同日に放送された。同日の『読売新聞』には「濱口首相の声色まで出し賑やかな復興気分を描く」<sup>20</sup>との見出しで台本が掲載されている。人気俳優の伊志井寛（1901-1972）がアナウンサー役等を務めている。3つの場面（景）で物語は構成されており、第一景では、地方のある駅の場面で、震災当時から始まる。以下、『読売新聞』記事に掲載された台本より引用する。

#### 第一景

##### 地方の或るステーション

東京大震災の報知をきいて殺到せる群衆のざわめき、自転車のベル、自動車の警笛、号外号外の呼び声、鈴の音等思い切って喧騒に入り乱れる。駅長（筆者注：伊志井）が罹災者輸送の第一列車が間も無く着くことを知らせる。

（略）

A あの東京の騒ぎと来たら、とても口や話どこの騒ぎじゃありやしねえ（略）

<sup>20</sup> 「濱口首相の声色まで出し賑やかな復興気分を描く」『読売新聞』1930年3月26日付 朝刊、p. 9。

浅草の十二階（下線部筆者）がモロにいつちまってよ、お隣の花屋敷の上へぶっ倒れたんだ。するてえと、ライオンだの虎だの豹だの象だの熊だの、ええと狒々だのゴリラだの大蛇だのってえやつ等があばれ出しやがって、そこいら中の人間を片っ端から食ってしまったんだ。  
男三 やれやれ、おつかねえ

「浅草の十二階」とは、1890年（明治23年）に浅草に竣工した眺望用の建築物「凌雲閣」（図5）<sup>21</sup>のことで、日本で初めての電動式エレベーターを備えていた。「浅草十二階」とも呼ばれる。震災時に8階部分から折れるように倒壊し、その無惨な姿（図6）<sup>22</sup>は現在でも印象に残る風景である。その象徴的な出来事から「ライオンだの虎だの…」<sup>23</sup>と大仰に畳み掛けることにより、漫画家らしい滑稽味をもたらししている。



図5 柏宗庵古柳『浅草公園凌雲閣登覽寿語六』（明治23年11月）

<sup>21</sup> 「東京都立図書館 TOKYO アーカイブ」より。

(<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=0000000004-00000048>)

<sup>22</sup> 「東京都立図書館 TOKYO アーカイブ」より。

(<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=0000000007-00004773>)

<sup>23</sup> 花屋敷では、明治中期から珍獣、猛獣を飼育、展示するようになり、当時ライオンや虎、象が飼育されていた。しかし、震災時ほとんどの動物は焼死した。また、生き残っていた動物も、のち避難所にもなったため、棄殺された（大日本雄辯會講談社編纂『大正大震災大火災』1923年より）。人を襲ったというのは無論、デマである。近年でも「動物園からライオン逃げた」とのデマを SNS に投稿し、逮捕された事件がある。



図6 絵葉書「大正十二年九月一日帝都大震災實況葉書 中段ヨリ崩壊セル浅草十二階」

第二景では、あるバラック街の情景となる。「どれひとつとして復興の気分の溢れないものはない。遠方で奏でる開店披露の楽隊さえ活気に満ちている」と、震災後しばらく経過したことを示す。芸者と師匠の再会の会話劇が展開する。

第三景では、復興祭を描く。冒頭は第一景、二景のように、情景を擬音で描くのではなく、アナウンサーの挨拶から始まる。

### 第三景 輝く復興祭

ABCD、こちらは東京中央放送局であります。只今から帝都復興祭に於ける市中各方面の情景の放送に移ります。放送開始に先立ってちょっとご説明申し上げて置きますが、この放送に用いますマイクロフォンは、こちらの放送局に於いて考案致しました最新式特別装置を施したものでございます。(略) 一々その現場へマイクロフォンを据え付けなければならなかったものでございます。

(略) およそ世界の音と聲とに於ける出来事は、全て居ながらにして解決出来る。ダイヤルの廻し方によって各方面に自動的にマイクロフォンが働くのであ

ります。(略)

漫画家の水島らしい演出が示されている。人気俳優である伊志井の声で、本物のアナウンサーと同じように番組を案内し、同日行われた帝都復興祭の実況パロディとなっている。また、マイクが「最新式特別」「自動的に働く」と伝え、当時なかった技術を堅苦しく大袈裟な言い回しで表していることから滑稽味が生じている。そして、「最新式特別」のマイクは「帝都復興行進曲<sup>24</sup>」などの奏楽を通過し、時の濱口首相らしき声<sup>25</sup>を拾う。そこでアナウンサー（伊志井）は「どうやら、これはガマロキンシュク氏の演説のようであります。流石のキンシュク氏もこのところキンシュクのキンを解禁したらしくございます」と、諷刺もきかしている。この後ジャズの音楽が奏でられるが、番組の終盤では、震災で行方不明になった子供を探す夫婦の会話を描く。

女　ちよいとあなた。あの、あすこで鳩に豆をやっている子、何だかシゲ坊に似ているようじゃありませんか。

男　(略) あの子が今居れば、もう十になっているんだから、もう少し大きいさ。

実はこの夫婦の子供らしきシゲ坊の姿が別の場面で描かれている。アナウンサーは最後に、なんとかこの夫婦とシゲ坊をつなげてあげたいと、聴取者に呼びかける。しかし、そこで「あー、器械に故障が生じました」と、街の雑踏音となり終幕する。

帝都復興祭が開催されたとはいえ、震災から7年、描かれた夫婦のように、変わりゆく街の中で行方不明になった家族を探し続ける人も多かっただろう。物語中の夫婦にはリアリティがあり、子供との再会が希望として示唆されたことで、慰安放送の役割も果たしている。またアナウンサーの両者をつなげ

---

<sup>24</sup> 1930年3月ビクター製作。作詞 西条八十、作曲 中山晋平、独唱 羽衣歌子、合唱 日本ビクター合唱団。復興祭に合わせて多くの楽曲が作られた。

<sup>25</sup> 濱口首相は、俳優の高梨使堂の声まねによる。濱口雄幸(1870-1931)が1929年に就任後、財政緊縮、金解禁を断行したことを諷刺している。

たいとの呼びかけは、孤児や子を失った親の悲しみが未だ多くあることを伝えており、報道性、社会性も帯びている。

「ラヂオ風景『帝都復興』」は、ラヂオの聴覚的特性と放送の同時性を活かしながら、前半は気楽に楽しめる実況パロディ劇として、後半はドラマとして楽しめる番組となっている。前述のドキュメンタリードラマとしてみなすことができる5つの要素のうち、(1) 実際にあった出来事、(3) 再現、(4) 物語、に相当する演出がなされている上に、(5) 報道性、社会性が強い、をも満たしており、ここにドキュメンタリードラマ表現の萌芽を見出すことができる。

さらに「ラヂオ風景」では、次のような出来事も扱われている。1931年(昭和6年)4月7日「ラヂオ風景『漫画の春』」(水島爾保布 作・放送指揮)が放送されている。この番組は、郊外の住宅街や峠の茶屋、飛行機の中など、さまざまところで会話劇が繰り広げられるナンセンスとユーモア味のある内容である。その中の「街頭の春」という場面で、実況アナウンサーの声となり、花祭の行列にいた象が突如暴れ始めたと話す。台本が掲載されている『読売新聞』<sup>26</sup>から引用する。

アナウンサー 象は只今、尾張町の交差点の真ん中に立ち止まって、あの長い鼻をプロペラのように振り回しております。只今までその鼻のために被りました損害は、電車が三体、自動車が十六台、電柱が三十一本、街路樹が銀杏、すずかけを取りまぜて約七十本、これらはいずれも引き倒されたり、おつべし折られたり根こそぎにされたのでございます。幸いにまだ一人の死傷者もありません。

この後も、銀座を暴れまわる象を実況し、やがて眠ってしまった象を動物園と花屋敷の係の者が捕捉したことが伝えられる。しかし放送当日に、本当に象が街で暴れ出したと思ひ込んだ聴取者が警視庁に通報したことが翌日の

---

<sup>26</sup> 「ラヂオ風景 漫画の春」『読売新聞』1931年4月7日付朝刊、p. 9。

新聞記事<sup>27</sup> になっている。昨今のフェイクニュースにも通じる危うさがあるものの、放送の同時性の特徴が出た興味深い出来事である。また、虚構と現実の境目をこえた騒動として、しばしば取り上げられる 1938 年のラジオ番組『宇宙戦争』<sup>28</sup> (H.G ウェルズ原作) より 7 年早い。『漫画の春』は、聴衆によるパニックが起きるほどのことではなかったが、メディアを通して虚構と現実の境目が揺らいだ歴史的事件とみなすことができる。

## 2.2. 「ラジオ風景」の社会性とドラマ性

「ラジオ風景」では、漫画家だけではなく、多彩な背景の作り手が起用されている。1931 年 7 月 21 日放送「ラジオ風景『山のキャンプ』」は、登山家の石川欣一<sup>29</sup> (1895-1959) が執筆している。これは夏期期間の催しの一つとして、ニュースとしての役割も担った。また同年 10 月 29 日放送「ラジオ風景『音に聞く美術の秋』」の作者は、新聞記者の土岐善麿<sup>30</sup>

(1885-1980) であり、帝展を対象として扱うことで美術評を巧みに取り込んでいる。他、新聞記者が執筆した『新聞鳩便』(1932 年 5 月 8 日) は、伝書鳩と新人記者の活動を表現したもので、実際に起きた事件も取り入れられて



図 7 「懸賞募集」『ラジオ年鑑 昭和 7 年』(p. 281)

<sup>27</sup> 「街頭で象大暴れ！吃驚した警視庁」『読売新聞』1931 年 4 月 8 日付朝刊、p. 11。

<sup>28</sup> ラジオドラマ内で火星人襲来のニュースが読み上げられ、実際のニュースと思い込んだ聴衆により各地でパニックが起きたという通説がある。実際にはそのようなことは起きておらず、現在では都市伝説といわれている。(中垣恒太郎『リアリティ TV』以降のドキュメンタリー表現の変容——モキュメンタリーにおける『リアリティ』の創出『専修大学人文科学年報』第 52 号、2022 年、p. 34)。

<sup>29</sup> ジャーナリスト、翻訳家。

<sup>30</sup> とき・ぜんまる。朝日新聞記者、国学者、歌人。土岐は、1928 年頃から「ラジオ風景」の制作にも関わっている。





図 8 『おんごく』大阪天満宮の社にマイクを設備し祭の音の中継する『ラジオ年鑑 昭和 7 年』(p. 274)

いる。

また、ラジオドラマと同様に、聴取者を対象に脚本の公募が行われた(図 7)<sup>31</sup>。

1931 年(昭和 6 年)1 等に入選し、11 月 30 日に放送された「ラヂオ風景『円タクに聴く』」(久松 新作、小野賢一郎 放送指揮)は、新境地を開拓したとして執筆に値する。作者の久松新は大阪放送局の長谷川幸延<sup>32</sup>(1904-1977)のペンネームである。長谷川は同年 7 月 24 日に放送されたラジオドラマ『おんごく』で、実際の天神祭のお囃子の中継し、ドラマの中に取り入れる先駆的な試みをもたらした(図 8)<sup>33</sup>。

『円タクに聴く』(図 9)は、1 台のタクシーの中で、運転手と助手、入れ替わる乗客との対話から社会の情景を描いたものである。放送日に『朝日新聞』など<sup>34</sup>に一部掲載された台本から以下、引用する。

電車の交差点付近のラッシュアワー、交通巡査の笛、自動車、電車、自動車、

<sup>31</sup> 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和 7 年』1932 年、p. 281。「国会図書館デジタルコレクション」より (<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1260055/1/151>)。

<sup>32</sup> 小説家。大阪放送局開局当時から囑託として採用され、ラジオドラマの脚本などを執筆した。「作者の正体とその言葉」『大阪毎日新聞』1931 年 11 月 30 日付朝刊、p. 8。

<sup>33</sup> 日本放送協会『ラジオ年鑑昭和 7 年』1932 年。「国会図書館デジタルコレクション」より (<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1260055/1/148>)。

<sup>34</sup> 「ラヂオ風景『円タクに聴く』涙と笑ひで描く都会の裏」『朝日新聞』1931 年 11 月 30 日付朝刊、p. 5。「圓タクの客に見る現代社会の万華鏡」『読売新聞』1931 年 11 月 30 日付朝刊、p. 5。「乗客に映った世相さまざま」『大阪毎日新聞』1931 年 11 月 30 日付朝刊、p. 8。



ドキュメンタリードラマ表現の萌芽を探る——NHK ラジオ草創期「ラジオ風景」を中心に

荷車の行進曲。

(略)

交通巡査 (笛) オイ、コラ、自動車待て、ストップ、オーイ

運転手 すみません、ツイその…

巡査 何がツイそのだ、どこのタクシーだ、鑑札を見せろ

運転手 すみません

背後の自動車の追い立てるようなラッパ、四方になる電車のベル、騒然となつてくる群衆

(略)

助手 どうしたんだい、宮君、今日は朝から変だぜ

運転手 うむ、(略)、小さい奴が病気なんだ…

助手 ふむ、そりゃいかんな

(ここまで『朝日新聞』より引用)



図9 『円タクに聴く』収録風景(『ラジオ演劇』p.259)より

「円タク」とは、1924年に大阪で登場した1円均一で走るタクシーのことである。東京では1926年頃登場した。1930年代頃には助手が同乗していた。冒頭、交差点のラッシュアワーから、助手と運転手の会話となり、当時の状況が窺える。その後、乗客として芸者とその旦那、映画女優に憧れて上京してきた女を誘惑する男、仲の良い親子連れ、酔客など次々と乗せていく。最後に運転手は、一日の稼ぎを投げ打って、病気の子供のために、自動車の玩具を買い求めて帰路に着くところで終幕する。

運転手「うちの子供にキャデラックは少し贅沢だ。フォードのハコハンでも買ってやろうと思ったんだが……」

助手「いいやな、さあ君の坊やに僕のお見舞いだ、これを足して買ってくれよ」

運転手「そんな事しちゃあ君」

とかいう風に二人は仲良くその美しい玩具の自動車をいぢくりながら…朗らかに笑いながら自動車を家路へと急がせ行く……幕

(ここまで『大阪毎日新聞』より引用)

選者<sup>35</sup>の一人である土岐は「悲劇的、喜劇的の情景が一台の圓タクを中心に交錯しつつ、最後まで一種の統一を保っている点など、選者は皆作者の構成的技能を推賞したものである」<sup>36</sup>と講評している。さらに翌月12月5日『朝日新聞』では「ラヂオ風景評 成功した『圓タクに聴く』」<sup>37</sup>と報じられ、次のように評価されている。

はじめて、ラヂオを主題とした藝術を聴いた、少なくとも藝術の中にラヂオの

---

<sup>35</sup> ほかに、池部鈞、徳川夢声、水島爾保布など。当時文藝課長の久保田万太郎も選者である。

<sup>36</sup> 「当選のラヂオ風景その選者の一人として」『朝日新聞』1931年11月30日付朝刊、p. 5。

<sup>37</sup> 「ラヂオ風景評 成功した『圓タクに聴く』」(『朝日新聞』1931年12月5日付朝刊、p. 9)では「安三郎」とクレジットされている。朝日新聞劇評担当の秋山安三郎(1886-1975)のことであろうと考えられる。

ドキュメンタリードラマ表現の萌芽を探る——NHK ラジオ草創期「ラヂオ風景」を中心に

血が流れている、今までのラヂオがほんの聲や音のお取次に過ぎぬ。

『圓タクに聴く』は、ラヂオ藝術はこうして進むべきもの、と不完全ながらもその見本を見せられたような気がして愉快である。

それまでの「ラヂオ風景」では、街の情景をいくつかの場面（景）として擬音と和楽など既存の演芸を交えて描くものが多かった。内容も季節の事柄や諷刺など、気楽に楽しめるものが中心であった。しかし、この『圓タクに聴く』は、1 台のタクシーの中という限られた場面で、さまざまな背景の乗客との会話劇で世相を映し出し、社会批評の趣を帯びている。また、次々と客が入れ替わることで、聴取者にとっては、タクシーが走っている時間をリアルタイムに感じさせる効果もあったにちがいない。

さらに最初の伏線については、病気の子供のために玩具を買い帰路につく運転手たちの姿によって、その伏線を回収し、ドラマとしても巧みな構成となっている。佐々は「単純なる印象の羅列から出発したラヂオ風景も、最近遂に社会風景というようなものを取り入れ、単純な印象以上のものを要求してきていることである。（略）その形式といい、内容といい、従来のラヂオ風景と異なり、新たなる境地を開拓していることに於いて、充分注目すべく作品である」（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』p.258）と高く評価している。

### 3. 「ラヂオ風景」の評価と位置付け

BK による聴取者の嗜好調査<sup>38</sup> では、慰安放送のプログラムにある大衆演芸のうち、大阪落語と浪花節が 10%の人気を集め、ラジオドラマは 7.7%、ラヂオ風景は 6.4%である。大衆演芸の中では高い人気といえない。しかし、放送がある日には、新聞におおよその台本が大きく掲載されており、作を手がけた漫画家本人のイラストもあり、人気俳優も起用していることから、聴取者の認知度は相当にあったと考えられる。

1932 年（昭和 7 年）7 月 23 日『朝日新聞』夕刊（2 頁）では『ラヂオ風

<sup>38</sup> 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和 7 年』1932 年、p. 297。

景』式でオリンピック気分 実況放送は実現薄」と報じている。この年開催されたロサンゼルス・オリンピックでは、放送権料の折り合いがつかず、実況放送を実現させることができなかった。そこで、競技を観戦した時の様子を後からスタジオで、あたかも眼前で行われているかのように語る「実況放送」がなされたのだ。そのことを「ラヂオ風景」式、「つまり、ラヂオ風景の如く出来るだけ実況放送と変わらぬようなニュース放送を行うよう手はずを整えている」と、伝えている。このような方法をとったのは開催国の中で日本だけであり、こうした試みを実現できたのは、「ラヂオ風景」の実績を踏まえてのことであった。

さらに「ラヂオ風景」は、制作者たちに手ごたえを実感させる番組であった。佐々は「全く JOAK が世界的発明とも言うべきである」（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』p.247）、「芸術的独自性を開拓したら、必ず放送芸術上の新星を期待することが出来るに違いない」（p.263）と述べている。また、AK の小林徳二郎<sup>39</sup> は、「このラヂオ風景もあながち芸術的価値のみの上の存在でなくともよしい。（略）そこでラヂオ風景は自由な存在である。白紙としてラヂオの上に存在し、将来も流動して行って差し支えないと思うのである。そこで相当の未来あるラヂオ芸術の一部分だと私は考えるのである」（p.258）と述べている。

実際に、その後も「ラヂオ風景」は、演芸を中心にした、ナンセンスでユーモアな内容や、季節の行事に合わせた実況中継、最新の科学や経済の情報を取り入れた内容、歴史パロディ劇など、さまざまなテーマや形式を取り入れて、不定期ながらも継続される。しかし、時勢柄、次第に戦時色の強い番組づくりとなっていく。

1938年（昭和13年）4月10日放送『銃後の晩御飯』、7月31日放送『非常時紙芝居』は、銃後の生活を守ることを啓発する内容となっている。1939年（昭和14年）『英霊に捧ぐ』（西条八十 作）、8月3日『前線ところどころ』、1940年（昭和15年）『愛国行進曲』や『勝って兜の緒を締めよ』など

---

<sup>39</sup> NHK プロデューサー。仮放送時代から芸能番組を担当。のちの文芸部長を務める。

の番組が続く。また、「ニュース演芸<sup>40</sup>」や「ラヂオ小説<sup>41</sup>」など新たな形式の番組も開始し、1941年（昭和16年）頃には、第一線の役割をラジオドラマ、ラヂオ小説に譲り、以後、姿を消すことになる。

#### 4. まとめと考察

1925年（大正14年）の先駆的番組「東京景物詩『夏の夜』」から1941年頃まで不定期に放送され、筆者が現在（2023年1月）までに確認できた番組は約100本である。おおよそ夜7時か8時頃から60分～90分くらいの番組として放送されていることが多い。主な番組と関連事項を「表1」にまとめた。

1925年「東京景物詩」として登場した当初は、ラジオと生活が身近にあり、気楽に楽しめる番組として、擬音を駆使し、演芸などを取り入れ、季節に合った内容としていた。さらにラジオの特性を活かした臨場感を演出するために隅田川からの中継を実現し、実際の川音で涼を提供する効果をもたらした。

ラジオドラマとは異なる表現のあり方を模索するため、当時人気の漫画家や新聞記者を作家として積極的に起用した。漫画家の池部や水島、岡本による、ナンセンスでユーモアのある荒唐無稽な場面の構成と、多様な演芸をミックスする演出、漫画的観察眼による都会風景の描写を通して、ラジオの新たな楽しみを提起した。

特に水島の1930年『帝都復興』は、実際の国家事業である帝都復興祭式典と同日放送で実況をパロディ化した試みは、現代のドキュメンタリードラマの要素を多く共有しており、このジャンルの萌芽をここに見出すことができる。また、1931年懸賞受賞作『円タクに聴く』は、1台のタクシーの中で、放送とほぼ同時に時間が進行し、会話劇を通して世相を描いた。佐々は、このような番組が「ラヂオ風景」から出てきたことに対して、「ラヂオ風景の現

---

<sup>40</sup> 1934年（昭和9年）に開始。一週間の主なニュースを、ラジオドラマ、歌謡、漫談、浪花節、琵琶、擬音その他の形式にして演芸化し、毎週日曜に放送された。

<sup>41</sup> 1934年（昭和9年）『母のこころ』（北村喜八作）、『マダムX』（八住利雄作）を放送したとき「ラヂオ小説」の名称をつけたことが最初。翌年の「連続長編ラヂオ小説」は大好評となった。

表 1 : 「ラヂオ風景」主な番組と関連事項

放送日時	番組名	概要
1925.7.19	ラヂオ劇『大尉の娘』	
7.20	<b>東京景物詩『夏の夜』</b>	「ラヂオ風景」の先駆的作品
8.13	ラヂオドラマ『炭坑の中』	ラヂオドラマのために制作。
1928.7.31	<b>ラヂオ風景『隅田川十二景』</b>	はじめて「ラヂオ風景」と冠する
1929.8.24	ラヂオ風景『水の上の物語』	隅田川から中継。実際の川音で涼を呼ぶ
1930.3.26	<b>ラヂオ風景『帝都復興』</b>	復興祭開催の日に実況パロディ劇
11.10	ラヂオドラマ『クラッシン号、イタリア号を救う』	実際の遭難事故を題材にしたラヂオドラマ
1931.4.7	ラヂオ風景『春の漫畫』	象が街を暴れる場面を、聴取者が本当のことだと思い、警察に通報する
7.12	ラヂオ風景『山のキャンプ』	ニュースの要素を加える
7.24	ラヂオドラマ『おんごく』	天神祭の中継音をドラマに使う
11.30	<b>ラヂオ風景『円タクに聴く』</b>	懸賞作品。1台のタクシーの中で繰り広げられる会話劇。
1932.7.23	<b>ロサンゼルス五輪「実感放送」</b>	「ラヂオ風景式に」
	ラヂオ風景『花火と水と』	両国の花火大会を実況と演芸を放送
1933.5.30	ラヂオ風景『善光寺参拝』	長野放送。善光寺からの実況中継。
12.14	ラヂオ風景『陶器焼く窯』	名古屋放送。陶器を作る少年少女が出演。
1934	「ニュース演芸」「ラヂオ小説」 放送開始	
1938.4.10	ラヂオ風景『銃後の晩御飯』	
1939.7.14	ラヂオ風景『英霊に捧ぐ』	西条八十作。戦時色強い番組が増える。
1941.4.11	ラヂオ風景『生産日本めぐり』	

実性は、例え過去の物語を述べ、その幻想を現す場合でも、現実性への覚醒を予想してかかれなければならない程、この現実性は切迫した意味を持っている」（『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』p.268）と述べ、その試みを高く評価している。やがて他の放送局でも、地域性や中継を活かした番組も作られるようになり、ロサンゼルス五輪では「実感放送」を生み出した。

しかし、次第に戦時体制になるにつれ、戦時色の濃い啓蒙的な番組となり、「ニュース演芸」や「ラヂオ小説」の放送開始により、その姿は消えてしまっ

た。

ラジオドラマでもない、著名な劇作家や小説家が戯曲化したものでもない「ラヂオ風景」は、残念ながら台本がほとんど残存していない。またラジオ史の中で、擬音の歴史の一部に注目されることがあっても、総合的な研究はこれまでになされてこなかった。本論ではドキュメンタリードラマの萌芽を「ラヂオ風景」に探り、その先駆的試みについて検討した。

さらに、実況や中継の技術の変遷や、地方局による地域性の発信、ラジオにおける演芸番組の聴取者の受容、戦時体制化の啓蒙番組のあり方についても調査を進めていくことにより、メディア文化史の中で「ラヂオ風景」を捉え直すことで、ドキュメンタリードラマ表現の生成と発展の過程を辿っていくことを今後の課題としたい。

### 主要参考文献

佐々健治『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』同文館、1934年。

竹山昭子『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』世界思想社、2002年。

日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和6年』誠文堂、1931年。

日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和7年』～『ラジオ年鑑 昭和13年』日本放送協会出版。

日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和15年』日本放送協会出版、1940年。

日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和16年』日本放送協会出版、1941年。

日本放送協会編『日本放送協会史』日本放送協会出版、1939年。